師匠と一夜

ワンナイト・ホラー　3

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18819605

霊幻総受け, モブ霊, 芹霊, エク霊, もぶお兄さん×霊幻, ♡喘ぎ, 暴力描写, R-18, モ腐サイコ100, モ腐サイコ小説50users入り

ワンナイトしまくってる師匠が相談所のメンツにバレて泥沼化する話の３話目です。今回少しですが、エロい暴力描写があります。なお攻めの倫理観がアレとなっております。お好きな方はよろしくお付き合いください。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

ワンナイト・ホラー　3

鼻の下にメンソレータムを塗る。
全身に虫除けを振る。
顔をぐりっと触って、いつもの営業スマイルを作る。
ボロアパートの前に立って、チャイムを鳴らした。
「……はい」
「霊とか相談所の、霊幻新隆です」
ボサボサの髪に、ツンと香るアルコール臭。
首元がダルダルの黒Ｔシャツに灰色のスウェットを履いた４０代くらいの女性が、顔を出した。
みーくんのお母さんだ。
若いな。それに、申し訳無いが、みーくんとあまり似ていない。
みーくんは父親似なんだな……。
「……！お待ちしておりました」
俺を見て顔を輝かせるお母さんがドアを開ける。
部屋の中は、不気味なほど片付いていた。俺が来るから片付けたんだろうが、生活必需品まで捨てたんじゃないか？と思える室内は、病的な「見栄」を感じさせた。
「ちらかっていてお恥ずかしいですわ、高名な先生に来ていただくというのに、こんなものしかお出しできなくて」
お母さんの格好と態度がチグハグだ。あからさまな引きこもりのお母さんは、高そうな（ボーンチャイナか？）ティーカップにフォートナム&メイソンのアールグレイを煎れて持ってくる。
「先生、私、悪霊に取り憑かれてるに違いないんです」
ダイニングテーブルに向き合うようにして座ったお母さんは真剣にそう言い出す。
「きっと、美築（※みーくん）を身籠った時に取り憑かれたんですのよ。それから夫の態度が急変して帰ってこなくなって、まだ未婚だった私は勤めていた女子校を退職するよう強制されて。両親も人が変わったようになって。私、本来はもっとデキる人間なんですの。子育てだって完璧なはずなのに、なんで、なんで……」

来るぞ。
「ああああああああああああああ！！」
ボタボタボタと泣き出したお母さんは両手で頭をかきむしる。
「あの男！あの男！！許さない、許さない！！殺してやる、殺してやる……！！」
ジジ、と胸ポケットに入れてきたお守りが焦げ臭く音を立てる。
モブに言って作って貰った魔除けだ。
残念だが、お母さんそのものが「悪霊」に近い存在になりかかっている。
恨みつらみをつのらせ、人を呪って生きている。このまま死ぬことが有れば間違いなく悪霊になるのだろう。
だけど。
まだ間に合う。
「確かに悪霊が憑いていますね。どうですか、今日はお試しコースで除霊してみませんか」
「お試しコース……？」
「お母さんは霊媒体質です。一度除霊しても、また霊が近寄ってくるでしょう。お試しコースとは呼んでいますが、継続しやすいお値段で除霊を提供させていただいております」
「……やってみてください」
「では、儀式を行います」
カバンから小皿を出し、部屋の四隅に塩を盛る。すぐに湿気てくる盛り塩に、やっぱりなと思う。掃除をかなりサボっている部屋の特徴だ。ここは、日頃はゴミ屋敷なのだろう。
テーブルを少し退けて、施術用のマットを引く。
「こちらにうつ伏せになってください。身体から悪霊を追い出します」
「……分かりました」
値段はＡコースだが、今回は本気の施術だ。とにかくお母さんの信頼を勝ち取らないと。
アルコールで緊張した肩と腰を重点的にほぐしていく。
「……身体がとても軽くなりましたわ」
お母さんの目に光が戻りつつある。

「頭も清めましょう。洗面台に案内していただいても？」
持ち込んだシャンプーとリンスでお母さんの髪を洗い、少し切って整える。ブローとスプレーで整えた。
「化粧は古来より魔除けとして行われてきました。その力を借りましょう」
カバンからメイク道具を取り出して、お母さんに化粧をほどこす。
「まあ……本当につきものが落ちたようですわ」
鏡の前にいるのは、品のいいお嬢さんだった。この人はきっと良いところの娘さんだったのだろう。
「どうです、これから一緒にお出かけしませんか？」
「あら……悪くありませんね」
「除霊の仕上げに、一緒に病院に行きましょう」
お母さんがこわばる。
「息子さんから病院に行けとうるさく言われているのでは？病院は清浄な気が満ちています。除霊に最適ですし、息子さんに『行った』と胸を張って言えますよ」
「そう……そうですね……」
「帰りにおしゃれなカフェでランチにしましょう。おすすめにご案内しますよ」
「……！いいわね」
お母さんはいそいそと自分の部屋らしきところに引っ込み、着替えて出てくる。
シフォンのブラウスに明るいブラウンのスカートを履いたお母さんは、見違えるようだった。
病院に行くにもみすぼらしい格好は避けたいものだ。化粧やヘアセットは必須だった。何とか誘導できてよかった。
「ちょっとお花を摘みに」
お母さんがトイレに消える。
こぽん、と酒瓶を傾ける音がして、瞠目する。
「では先生、行きましょうか」
楽しそうなお母さんの姿に、みーくんが重なる。
「行きましょう」
あらかじめ打ち合わせしておいた精神科に連れて行った。

「先生、私ね、」
堰を切ったように話し出すお母さん。人と話すことに飢えているのだろう。
優しそうな精神科医はうんうんと話を聞いている。
「……お母さん、今、困っていることはありませんか？」
そして、お母さんの言葉が止まってからゆっくり話しかける。
「お酒──」
思わず口にして。
「──いえ、夜眠り辛くって」
お母さんは誤魔化した。プライドが邪魔をしたのだろう。
「そうですか。それではよく眠れるお薬を出しましょう」
「はい、ありがとうございます」
「除霊のことについて霊幻先生にお聞きしたいことがありまして、少し待ち合い室でお待ちいただいてもいいですか？」
「承知いたしましたわ」
２人きりになって。
「次はいつ連れてこれそうですか」
深刻な顔をして医者が俺に言う。
「２、３週間後になるかもしれません」
マッサージの効果が切れるのがその頃だ。また予約を入れるとしたらその時期になる。
こぽん、と廊下から、酒瓶を傾ける音がした。
「今すぐ、入院させたいのです。なんとか説得していただけませんか」
医者から見ても、みーくんのお母さんはひどい状態らしい。
「……役所に応援を頼みます。その間、カフェに連れて行って時間を稼ぎます。それで何とかなりますか？」
「……こちらも人数を揃えます。やりましょう」
役人の松上さんに電話をかける。手短に説明して、みーくんのお母さんに怪しまれないうちに診察室を出る。
「さあ、支払いを済ませてカフェに行きましょうか」
とびきりの営業スマイルにほっとするお母さん。
「こんなところを見られたら、夫に誤解されちゃうかしら」

頬を赤らめながらお母さんが言う。
「夫は必ず結婚するって言ってくれたんです。だから私、既婚者なんですのよ」
ああ。
クソ男死ね。
みーくんのお母さんは恐らくイケメンだったみーくんの父親に遊ばれて、子供ができたから捨てられたのだ。
そのせいでお母さんもみーくんも人生がめちゃくちゃになった。
良くある話で、何度聞いても胸糞が悪い。
「……ここのカフェはショートケーキがおすすめですよ」
「じゃあ、デザートはそれの紅茶セットにしようかしら」
でもよ、神様。
世の中に超能力があって霊能力があって霊や妖怪がいるのなら。
クソ男が改心してお母さんやみーくんの元に戻って真面目な父親になる、それぐらいの奇跡はサービスしてくれてもいいんじゃねぇの？
……まあそうはならないのを、無精子症の俺は痛いほど知ってるんだけどさ。
はーぁ。神様はホントクソだな。
「こんな時間、久しぶりですわ」
カルボナーラを食べながらお母さんが呟く。
「先生、また必ず予約します」
俺は鷹揚に頷く。
ピリリリ、と俺の携帯が病院からの着信で鳴る。
「はい、霊幻です。ええ！？そうなんですか、はい……はい」
深刻な顔を作ってお母さんに向き直る。
「除霊について深刻な問題が見つかったそうです。一度病院に戻りましょう」
「そうなのですか！？分かりました」
「食事を終えてからでいいそうです。ランチを楽しみましょう」
それから雑談をして。
機嫌の良いお母さんを連れて、病院に戻る。
今度は病棟の診察室に案内される。

外来棟とへだてる大きな鉄格子の扉に、お母さんが不安そうな顔になった。
「さ、こちらですよ」
笑顔で誘導する。
「お母さん、あなたは検査の結果、重度のアルコール依存症だと分かりました。このままでは命に関わります。今すぐ入院しましょう」
男性看護師が３人と、役人が３人出口を塞ぐように立っている。
「わ、私──お酒なんて、飲んでませんわ。嫌です、入院なんてしません」
お母さんの息が上がり始める。
「お母さん！悪霊です。悪霊がお母さんにお酒を飲ませているのです。これは強力な悪霊です。パワースポットでお祓いしてもらうのが一番ですよ！！」
目を見て、嘘をつく。
「あ、悪霊が、私にそんなことを……」
「病院は最強のパワースポットです。安心してください、私もお見舞い除霊を続けます。……お母さん、悪霊に負けてはなりませんよ」
ぼんやりとしたお母さんが何度も頷く。
「わたし……にゅういんします。じょれいしないと……」
トランス状態のお母さんはぶつぶつ言いながら入院書類にサインしていく。
「あくりょうさえいなくなれば……わたしはきょうしにもどって……みーくんはだいがくにいくんだわ……じょれい……じょれいしないと……あああ」
ぱっ、とお母さんが顔を上げる。
「あの、ひとくちだけ、のんでもよろしくて？」
役人が息を呑む。
「ええ、どうぞ」
にっこりと医者が笑う。今はとにかく、信用させてサインさせなくてはならなかった。
お母さんはカバンからお茶のペットボトルに詰め替えた日本酒を取

り出して、こぽん、と呑んだ。
「ふう」
書類を書き切って。
みーくんのお母さんは、入院することになった。

「あとは役所にお任せください」
「……私はお見舞いに来ても大丈夫ですか？」
「ええ、病院に支援の方だと話を通しておきますので」
「支援だなんて、たいそうなものじゃありませんが……」
空を仰ぎ見る。
「これで良かったんですかね」
「もちろんです。あなたのお陰で、長谷川さん親子に必要な支援の手が届いた。感謝しています」
「はは……」
なにもかも自己満足なんじゃねぇのか、と自問自答する。
俺の目は、死んでたと思う。

※

相談所に戻って、次の予約客のカルテを出す。
「霊幻さん、次のお客さんですが、多分また憑けてくると思います」
「……またかよ。お守りか何かで対応した方がいいな」
引き出しから芹沢に力を込めて貰う用の相談所謹製のお守りを取り出す。
「分かりました」
するり、と。
芹沢が俺の腰を抱いてくる。
「芹沢、近い」
「ああ、すみません」
時折芹沢の目に宿る、『お前の痴態を知っているぞ』と言う劣情から、目を背け続ける。
居心地の悪い相談所になっちまったもんだ。

『お前の嘘を知っている』
と言わない芹沢は、おそらく警告の役割をしているのだろう。
俺はワンナイトをしないとあいつらに約束した。
それをただ破っただけだったら、いくらでも言い訳ができた。
でも。
芹沢は、だめだ。
芹沢ともし本当に寝たとしたら、それはもう、俺をザックリと傷つける事実だ。結構立ち直れないレベルに。
だから俺は確かめられない。昨日寝たのはお前だったの？とは絶対に。
芹沢が嘘を吐いていてくれるのなら。
その嘘に、のっかるしかない。
……こしゃくな。
やり口が気に入らねぇよ。おおかたエクボの発案だろ。そんなんで俺の行動を制限できると思ったら大間違いだ。

ここまでくりゃあ意地もある。
１０年近くワンナイトはバレて無かったんだ。今回もいけるだろう。

俺は５駅先の街で、発展場になっているゲイバーに入った。
注意深く尾行を確認して相談所メンバーがついてきていないのを見たし、いつもより大分遠い発展場だ。
ここなら大丈夫だろ。
ここもシークレットカクテルをノンアルコールにはしてくれない。
軽く舐めていたら、コワモテの男が隣に座った。
ヤクザかな。トラブルは避けたい。
さっ、と俺はカクテルに手でフタをした。「お断り」のサインだ。
「俺さ、こういうもんなの」
ちら、とコワモテの男が胸元から警察手帳を出す。
「……事情聴取？」
「違う違う、今はプライベート！でもほら、俺、顔が怖いじゃん？だから良く相手に逃げられちゃって。頼むよ、今晩楽しもう？」

ふむ。公務員か。安心して遊べそうで悪く無いな。
「俺、恋人募集してなくて、割り切りでお兄さんの身体目当てだけど、それでいいなら」
「うわ、エッチなこと言ってくるねぇ。いーよ、俺もその方が助かる。でも、」
コワモテ警官がするりと腰を抱いて耳元に唇を寄せてくる。
「セフレは？」
ぞくぞくぞく、と耳から甘い衝撃が腰まで落ちる。
「だぁめ♡」
お返しと警官の耳にキスして囁く。
「……っ、残念」
「新しい人間関係求めてないのよ。セックスだけ楽しみてぇの」
「トラブルに巻き込まれんなよ？何か有れば連絡してくれよ」
コワモテ警官が紙ナプキンに１１０を書いて渡してきて腹を抱えて笑う。アタリの相手だな。
プルルル、とコワモテ警官の携帯が鳴る。
「……っと、会社からだわ。ちょっと待ってて」
「ん、分かった」
コースターで２人のカクテルにフタをしたまま、ぽりぽりとお通しのナッツをかじる。
あれ……。
ちょっとお酒を舐めすぎたかな、目の前が、回る……。
「お待たせ」
隣に座った男の耳が欠けていたことすら、今、気が付いた。

※

「んんっ」
ラブホの部屋に入ってすぐに口付けられて、バランスを崩して転けそうになるのを、コワモテ警官がガッと抱いて支える。
がっつくじゃん。もう我慢できない、と言いたげなコワモテ警官にうっとりする。
激しい夜が期待できそうだ。鍛えてるだろうから、アッチも良く勃

つだろうしな……♡
くちゅくちゅと絡め合う水音が頭に響いて脳髄が痺れてくる。
ようやく口を離して。
「霊幻……」
切羽詰まった顔でこぼす警官。
あれ？
なんだ？
おれ、なまえ、おしえたっけ……？

あ

けいかんの
めが
みどりに
ひかって

そうだ、何でもない

「お兄さん、何て呼ばれたい？」
ふわふわした頭が気持ちいい。
「エクボ」
「えくぼかぁ。あだ名？」
「本名だよ」
「またまたぁ……」
冗談の好きな警官だ。
激しく俺の身体をまさぐるえくぼは乱暴に俺の服を脱がせていく。
「ボタン飛ばすなよぉ」
くすくす笑いながら愛撫を受ける。
乱暴に扱われるのは嫌いじゃない。余裕のない相手を見るのは楽しいし、俺の落ち込んだ気分にも寄り添ってくれる。
無精子症を知ってから、夜はいつも寂しくて鬱だ。それをセックス以外では埋められ無かった。
「れーげん、れーげん……ずっとこうしたかった」

ぎゅっと掻き抱いてくるえくぼに微笑む。
「酔ってんの？」
俺も抱きしめ返す。
「体温がきもちいーなぁ」
お互いのぬくもりが、ドクドクと鼓動にのってじんわりと伝わっていく。
「すごくドキドキしてる。期待してんの？」
えくぼの頬を撫でて、くすりとこぼす。
「期待してくれていーよ。俺、具合がいいってみんな言ってくれるから」
えくぼの顔が一瞬で殺気に染まって。
「な、なんだよ……」
俺は怖くなって身を引いてしまう。
「……萎えること言うなよ。ごめんな、俺様、ビッチアピール駄目なんだわ」
にぱ、と可愛らしく笑うから安心した。ああ、そういうタイプね。
「分かった。楽しもうぜ」
ちゅ、と鼻にキスすると、また抱きしめられる。
「ハグ好きだなぁ」
「体温が好きでな」
抱きしめられたまま裸の身体をまさぐられて、声がもれてしまう。
「あ……んっ、ぁあ……っ」
「霊幻……愛してる」
耳元で囁かれる睦言の真剣さに思わずどきりとしていたら。
かちゃん、と右手に手錠をかけられた。
「え」
ドン、とベッドに突き飛ばされる。
ヘッドボードの支柱に手錠が繋がれた。
「え……何すんだよ」
パチン、とバタフライナイフをえくぼが取り出してきて。
あーあ。
とうとうこういう相手に当たっちまったかぁ、と俺は一切の抵抗を諦めた。

目を閉じてえくぼの行動を待つ。
モブ、芹沢、エクボ、トメちゃん、それに、それに、たくさんの大好きなお前ら。
どうかお前らに、幸せがありますように。
「……何考えてやがる」
えくぼの声にうっすらと目を開ける。
「優しくしてね♡」
俺がいつもの甘ったるい声で言うと、えくぼが嫌そうに顔を歪める。
「てめぇ、どういう状況か分かってんのか」
「ヤるんだろ？痛くしないでくれよ♡」
ひたいに青筋を浮かべたえくぼがひた、とナイフの腹を俺の太ももにつける。
「っんあ♡」
びくりと身体が跳ねて、勃起した俺の性器がぷるんと間抜けに震える。
「お前、死ぬのが怖くねぇのか？」
「なぁ早くヤろうぜ……準備ならもうしてるからさぁ」
「聴け、色狂い。このまま殺されてもいいのかってきいてんだよ俺ぁ」
「財産はもう処分してある。家具も大したものは残ってないし、仕事の引き継ぎも部下に済ませてある。恋人も居ないし、毎晩遺書をテーブルに置いてから男漁りしてんだよ」
えくぼが驚きに目を見開く。
「俺が死んでも『安全』なようにしておかないとな」
思えば、この日を待っていたのかも知れない。
「こんな出来損ないの身体をヤって気持ち良くなってくれんなら、頼むわ」
「出来損ない、って」
「無精子症なんだよ、俺」
ぼろ、と涙が溢れる。えくぼが息を呑んだ。
「たったそれだけでよぉ、俺は自分のガキを諦めなくちゃならなくなったし、好きな人と結婚することもできなくなった」

ポロポロと、涙が止まらない。
「死にたいか？って訊かれると死にたくねぇけどよ、生きてるのが辛いんだよ。他人都合で殺されるなら、そんな楽なことはねぇかな」
えくぼをじっと見る。
「早くヤって、イかせてくれよ♡」
かちゃん。
左手も手錠がはめられる。
そんなことしなくても、暴れやしないのに。
「れーげん……どうして辛いって言ってくれなかったんだよ、お前」
かちゃん。
右足首にプレイ用の足輪が嵌められる。
「いや……言えないか、デリケートな話だもんな。でもこれは悪手だぜ。良く考えろよ、大馬鹿野郎。お前がワンナイトで殺されでもしたら、モブや芹沢はどんな狂い方するか分からねぇぞ？俺様だってそうだ。というか──」
ギラリとえくぼの目が光る。
「死ねると思ってんのか、お前」
ぶすり、とナイフが心臓に刺される。
「あっ♡」
──これで死ねる。解放感に腰がぶるりと震えて、射精した。
「くそエロいな」
えくぼが喉を鳴らす。
──しかし。
くっそイテェ傷口はみるみる間にナイフを押し出し、あっという間に塞がった。
「お前がワンナイトやってるって分かった時点で、『そういう何か』はモブか芹沢にされてるって思った方が良かったなぁ？」
なにこれ。
いたいだけで、死ねないじゃん。
「あ……」
かた、と身体が震える。

「ようやくいい顔になったなぁ？」
ぶすり、とまた太ももを刺されて悲鳴をあげる。
「いやだ、やめてくれ」
「さてと、俺様も楽しませて貰うとするかな」
ズブズブとえくぼが侵入してきて。
「〰〰〰っ、刺すならチンポだけにしろよ！！」
前立腺ごりごりイッてるっ♡
すっげーいいチンポなのにっ♡
集中できないっ♡♡♡
「あんっ♡イくっ♡イっ……ぎゃあああああああ！！」
また脇腹を刺される。
「イぎぞゔだったのにっ！！ばかっ！！」
「何でこの状況でイけるんだよお前。マジ頭のネジぶっ飛んでんな……っう」
ぶるりとえくぼだけ俺のナカで出す。
「ずるいっ！！」
「言うにかいてそれかよ……」
コンドームを付け替えながらえくぼが言う。
寸止めされた熱が腹の中をぐるぐる回って辛い。
「もっかい♡はやくズボズボしてえっ♡」
腰がかくかくと動いてしまう。
「正気かお前」
「チンポ勃たせながら言っても、間抜けなだけだからなっ♡♡」
ため息をつきながらえくぼが先っぽを俺の中に挿れる。
「んっ♡」
「おらよ」
ナイフで腕を刺される。
その痛みも、ちょっと、気持ち良くなってきた。
「ああああああああっ♡」
刺されてちょっと射精した。ナイフトコロテンだ。いよいよえくぼが呆れ顔になった。
「お前さんを形容する言葉がビッチじゃ足りなくて俺様、困ってる」

「いいからっ♡早く犯してぇっ♡♡」
もっと深くイキたい。
「あんっ♡ああっ♡えくぼぉっ♡ゴリゴリ、ゴリゴリしてぇっ♡♡」
だらしなく喘ぐ俺の姿は、えくぼにどう映ってるのだろうか。
「霊幻」
頭を撫でる手は、妙に優しくて。
「〜〜〜〜〜〜〜っ♡♡♡」
目の前がチカチカするような深いメスイキの熱の奔流に流された俺には、えくぼの顔は生理的な涙で良く見えなかった。

※

ばっ、と飛び起きる。
隣の男を確認して、ほっとした。
コワモテ警官だ。
昨日は酔い過ぎたのだろう。
変なプレイの幻覚を見た。
早く帰ろう。
「よう、霊幻――お目覚めか？」
ラブホのソファーから声がして。
ぎこちなく振り返る。
そこには何故か、守衛に憑依したエクボがいた。
「１回目は警告、２回目は予告だ」
シュボ、とエクボがタバコに火をつける。
「次はねぇぞ？」
目を細めるエクボに、ごくりと後ろめたさに喉が鳴る。
「俺たちはな、霊幻。お前が欲しくて欲しくてたまらねぇんだ。なりふり構わず手段を問わず、手に入れたっていいのを、お前がしてくれた約束だけをよすがに我慢してるんだよ」
哀れじみた声をエクボが出す。
「だがな、仏の顔も３度まで――ってやつだ。誤解されがちだかな、あれぁ３回目はねぇぞ、って意味だからな」
すぱーっ、と景気良くエクボがタバコを吸う。

「れぇ〜げん、お前が自分をないがしろにしたつもりで、踏みにじってきた俺たちの気持ちが、この世で最強の呪いとなってお前に襲い掛かろうとしてる。防ぐ方法はただ一つだ。男漁りをいますぐやめろ。……まぁ、できるんなら、だが」
首を傾げる。まるで出来ないみたいな言い方だ。
「嘘をつくぐらいなら、日替わりセックスの提案にのっときゃ良かったんだよ、お前は。そうすりゃセックスも楽しめたし、能力者達を怒らせることも無かった。それが……」
「……俺は昨日、ワンナイトしてない」
言いたいことばっかり言いやがって。流石に反論する。
「は？」
「証拠はあんのかよ、俺が昨日誰かと寝たっていう！」
横で寝ている警官を指差す。
「この人なら、寝てないって言うだろうな！！」
「てめぇ……この期に及んで……」
「お前らが俺に何かをしてるのなら、もう、好きにしろよ。お前らがそんな奴だとは思わなかった。軽蔑する」
ビキリとエクボの青筋が増える。
「こんの……っ！」
「勝手にお前たちの気持ちの責任を俺に取らせるな。俺はもう、絶対にお前らを好きにはならない。お前らなんか、きら──」
エクボが慌てて口を塞いでくる。
「ダメだ、霊幻。それだけは言わないでくれ。発動条件を満たしてしまうんだ」
「は？」
「お前が本気じゃ無かったとしても、儀式としては成立しちまう。頼むよ。俺はお前を失いたく無い。廃人にはしたくねぇんだ」
真剣なエクボの言葉に黙り込んでしまう。俺に催眠をかけているのなら、エクボだと思っていた。モブにも芹沢にも催眠能力は無いはずだからだ。
しかし──ここ最近のおかしな出来事が、催眠じゃないとしたら？
芹沢やモブが「呪い」や「儀式」を行なっていたとしたら？
ぞくっ、とする。あれだけ強力な能力者の呪いや儀式による「祝

福」なんて受け取ってしまったら、どうなるか分かったものじゃない。
「ともかく、芹沢が警告してくれた。俺様は予告した。最後に来るのは――報告だ」
「は？」
「俺たちがお前に何をしたのか、伝えることになる。お前がワンナイトを次にすれば、儀式は完成する。俺様はそこまでのことは望んでいない。いなかった。だけどな、芹沢やシゲオの気持ちまでコントロールはできなかった。だから頼むよ、霊幻」
タバコをもみ消して、エクボが真剣にこっちを見てくる。
「ラスボスを引っ張り出さないでくれ」
それを聞いた俺は。

中指を立てた手を、ゆっくりと真顔で持ち上げた。

続